

## 子どもの心を見つめて

今回、みみタロウは、滋賀県湖東広域衛生管理組合福祉課において、子どもの発達障害\*の心理判定員を  
 されておられる孫超さんにお話を伺いました。  
 (発達障害については、p3\*1参照)



中国江蘇省出身です。上海  
 外国語大学の日本語学科3  
 回生の時、日本語能力試験2級  
 に合格したのを機に、留学のた  
 め、来日しました。半年間、京都  
 造形大学日本語別科で日本語

を学んだ後、何を専攻しようかと考えたとき、思い浮かんだのが、中学生の時に読んだ「フロイトの精神分析」。心理学を勉強してみようと思ひ、立命館大学心理学科に入学。ゼミでは「異文化カウンセリング」をテーマにし、漠然と日本に住む外国人の役に立てたらいいなあ、と思つていました。さらに人間を臨床心理の学問だけでなく、哲学や人類学、歴史学などもっと広い側面から捉えたいと考え、大学院の応用人間科学研究科に進学。精神病棟での実習なども体験し、臨床心理学を超えて人間の背景について深く考える機会を得て、光が当たる一面の裏にある社会も含めて人間社会を見るようになりました。卒業後、福祉現場を知りたい思いもあり、今の職場に臨時職員として就職。1年後に正職員になって、11年になります。

現在、心理判定員として、湖東地域、4カ所の保健センターを回り、健診などで発達に躓きがあると思われた子どもの状態を判定し、療育教室をはじめ様々なケアに繋ぐ支援をしています。療育教室は、就学前のお子さんが対象で、定期的に親子でケアを受けて頂きます。子どもはスタッフと遊び、身体で環境や相手を理解し、日常生活をうまく送れるように学んでいきます。そしてお母さんもまた、その様子を見て、子どもの特徴に気づき、子どもとの関わり方を学びます。日本では、発達障害のお子さんには18歳まで支援は続きますが、できるだけ家庭でうまく生活できるように、そしてさらには地域に入っていけるように願っています。

発達障害は、医学的にどうにかなることは少ないのですが、人との関係や生活環境によって改善するものが多いにあります。子どもの健全な発達には、育児環境はととても大切で、衣食住の中で安定し、安心できる環境が作れな

いと、同年代の子どもと比べて異なる特徴を示すことがあります。外国人のお子さんの場合、落ち着いた生活基盤が築きにくい部分があつて、そのことが発達に影響を与えます。断乳や離乳食など育児習慣が異なる国の方もいらっしゃるなど、文化的な側面が発達障害の判定を難しくしている部分は確かにあります。しかし発達障害のベースは発達系遺伝子なので、文化的なものに左右されるものでなく、その判定や障害の度合いはどの国でもほぼ同じです。ただ、障害に対する受け止め方や対応については、国や時代により異なり、支援体制は非常に多様化しています。異文化と言うと国の文化と思われがちですが、日本の中でも、小さな地域ごとにそれぞれの文化があり、迷信的な考え方も残っていて驚かされることもあるんですよ。また、田舎に行くほど「異なることが悪い」というような文化も根強いので、その部分で、親には難しさがあつて、特に外国の方は大変かもしれません。僕自身も異文化の中にいるのですが、国籍の意識は年を経るごとに薄くなってきて、職場では僕が外国人だなんて誰も思つていません。でも、中国の方には中国語で直接カウンセリングができますし、他の外国の方も、名札を見て中国人だとわかると、親しみをもちたいだけなんです。カウンセリングでは、まずお互い思つていることを何でも話せることが大切で、そのような信頼の空間を作ることから始めています。

日本の福祉は、言葉の壁があると最初はとつきにくいかもしれませんが、一旦使い出すととても便利で、社会資源が沢山あります。早期に支援に繋がることで、子どもにできることは違つてきますし、関わる人の考え方が変わることによって、子どもを理解する人が増え、そこから支援の輪が広がります。発達障害の子どもさんのお母さんには、「かんしゃく」などのキーワードになる言葉を覚えていただくと、いざという時、支援者の迅速な対応につながります。また、子どもが話す言葉を親がわからないまましていると、親子間のコミュニケーションが希薄になりかねないので、保護者の方にはできるだけ日本語を学んでほしいと思つています。育児の心配があれば、一人で悩まないことが大切。まずは地域の保健師さんに相談してくださいね。